

源氏物語

御法

紫式部

青空文庫

なほ春のましろき花と見ゆれどもとも

に死ぬまで悲しかりけり
(晶子)

紫夫人はあの大病以後病身になって、どこということもなく始終わずら煩っていた。たいした悪い容体になるのではなかったが、すぐれない、同じような不健康さが一年余りも続いた今では目に立つて弱々しい姿になったことで、院は非常に心痛をしておいでのなつた。しばらくでもこの人の死んだあとのこの世にいるのは悲しいことであろうと知っておいでのなつたし、夫人自身も人生の幸福には不足を感じるところとてもなく、気がかりな思いの残る子

もない人なのであるから、こまやかに思い合つた過去を持つていて自分の先に欠けてしまうことは、院をどんなに不幸なお心持ちにすることであろうという点だけを心の中で物哀れに感じているのであつた。未来の世のためと思つて夫人は功德になることを多くしながらも、やはり出家して今後しばらくでも命のある間は仏勤めを十分にしたいということを始め院へお話して、夫人は許しを得たがっているのであるが、院は御同意をあそばさなかつた。それは院御自身にも出家は希望していられることなのであるが、夫人が熱心にそうしたいと言つている時に、御自身もいつしよにそれを断行しようかというお心もないではないものの、いったん仏道にはいった以上は、仮にもこの世を顧みることとはしたく

ないというお考えで、未来の世では一つの蓮華れんげの上に安住しよう
と約束しておいになる御夫婦であっても、この世での出家後の
生活は全然区別を立てたものにせねばならぬという御本意から、
こうして病弱な身体からだになつてしまった夫人と、離れておしまいに
なることは気がかりで、悟道にはいつた新生活も内から破れてい
くことを院は恐れて 躊躇ちゆうちよ をしておいになるのである。結局
は深い考えもなく簡単に出家してしまう人よりも、道にはいるこ
とが遅れるわけである。院の同意されぬのを見ぬ顔にして尼にな
つてしまうことも見苦しいことであるし、自分の心にも満足ので
きぬことであろうからと思つて、この点で夫人は院をお恨めしく
思つた。また自分自身も前生の罪の深いものであろうと不安がり

もした。以前から自身の願果がんたしのために書かせてあつた千部の法華經ほけの供養を夫人はこの際することとした。自邸のような氣のする二条の院でこの催しをすることにした。七僧の法服をはじめとして、以下の僧へ等差をつけて纏頭てんとうにする僧服類をことに精撰して夫人は作らせてあつた。そのほかのすべてのことにも費用を惜しまぬ行き届いた仏事の準備ができていたのである。内輪事うちわのように言っていたので、院はみずから計画に参加あそばさなかつたが、女の催しでこれほど手落ちなく事の運ばれることは珍しいほどに万事のととのつたのをお知りになつて、仏道のほうにも深い理解のあることで夫人をうれしく思召した院は、御自身の手ではただ来賓を饗きよう応おうする座敷の裝飾その他のことだけをおさ

せになつた。音楽舞曲のほうのことは左大將が好意で世話をした。宮中、東宮、院きさきの後の宮、中宮ちゆうぐうをはじめとして、法事へ諸家からの誦經ずきようの寄進きせ、捧げ物ささげなども大がかりなものが多いばかりでなく、この法会ほうえに志を現わしたいと願わない世人もない有様であつたから、華麗な仏会の式場が現出したわけである。いつの間にこの大部の経卷等を夫人が仕度したくしたかと参列者は皆驚いた。長い年月を使った夫人の志に敬服したのである。花散里夫人、明あ石夫人かしなども来会した。南と東の戸をあけて夫人は聴聞の席にした。それは寢殿の西の内蔵うちぐらであつた。北側の部屋へやに各夫人の席を襖からかみ子かみだけの隔てで設けてあつた。

三月の十日であつたから花の真盛まっさかりである。天気もうららか

で暖かい日なので、快くて御みほとけ仏のおいでになる世界に近い感じもすることから、あさはかな人たちすらも思わず信仰にはいる機縁を得そうであった。たきぎ薪こる（法ほけ華経はいかにして得し薪こり菜摘み水汲みくかくしてぞ得し）歌を同音に人々が唱える声の終わつて、今までと反対に式場の静まりかえる気分は物哀れなものであるが、まして病になつてゐる夫人の心は寂しくてならなかつた。明石夫人の所へ女によおう王は三の宮にお持たせして次の歌を贈つた。

惜しからぬこの身ながらも限りとて薪たきぎ尽きなんことの悲しさ

夫人の心細い気持ちに共鳴したふうのものを返しにしては、認

識不足を人から譏そしられることであらうと思つて、明石はそれに触れなかつた。

薪こる思ひは今日を初めにてこの世に願ふ法のりぞはるけき

経声も楽音も混じつておもしろく夜は明けていくのであつた。

朝ぼらけの霽もやの間にはいろいろの花の木がなお女王の心を春に惹ひきとどめようと絢爛けんらんの美を競つていたし春の小鳥のさえずりも笛の声に劣らぬ気がして、身にしむこともおもしろさもきわまるかと思われるころに、「陵王りょうおう」が舞われて、殿上の貴紳たちが舞い人へ肩から脱いで与える纏頭てんとうの衣服の色彩などもこの朝

はただ美しくばかり思われた。親王がた、高官らも音楽に名のあ
る人はみずからその芸を惜しまずこの場で見せて遊んだ。上から
下まで来会者が歡樂に酔っているのを見ても、余命の少ないこと
を知っている夫人の心だけは悲しかった。

昨日は例外に終日起きていたせいか夫人は苦しがつて横になつ
ていた。これまでこうしたおりごとに必ず集まつて来て、音楽舞
樂の何かの一役を勤める人たちの容貌ようぼうや風采ふうさいにも、その芸に
も逢あうことが今日で終わるのかというようなことばかりが思われ
る夫人であつたから、平生は注意の払われない顔も目にとまつて、
少しのことにも物哀れな気持ちあが誘われて来賓席を夫人は見渡し
ているのであつた。まして四季の遊び事に競争心は必ずあつても、

さすがに長くつちかわれた友情というもののあつた夫人たちに対しては、だれも永久に生き残る人はないであろうが、まず自分一人がこの中から消えていくのであると思われるのが女王の心に悲しかった。宴が終わってそれぞれの夫人が帰って行く時なども、生死の別れほど別れが惜しまれた。花散里夫人の所へ、

絶えぬべき御法みのりながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを

と書いて紫の女王は送った。

結びおく契りは絶えじおほかたの残り少なき御法なりとも

これは返事である。供養に続いて不断の読経どきよう、懺法せんぼうなどこの二条の院で院はおさせになるのであつた。祈禱きとうは常におさせになつていたが、たいした効果も見えないために、わざわざ遠い寺々などでさせることにもお計らいになつた。

夏になると夫人は暑気のためにも死ぬようになることが多かつた。病名も定まらぬ程度のものであるが、ただ衰弱がひどかつた。堪えがたい苦しみをするというのでもない。女房たちの心にも、どうおなりになるのであろう、このまま危篤になつておしまひになるのではなからうかという不安が生じてきて、惜しく悲しくばかりそれらの人々も思つて歎いていた。こんなふうであつたから

院は中宮を御所から二条の院へ退出おさせになった。当分東の対たいにお住みになるはずであつたから、いったんこの西の対へおはいることになることにより、お迎への儀式なども定例どおりにしていながらも、この宮のますますお栄えになる未来の日までを見ずに終わるかというように夫人は悲しんだ。お供をして来た役人たちの姓名の披露ひろうされる時にも、だれがいる、かれも来ていると、女王は深く耳にとまる気がした。高官たちも多数に来ていたのである。しばらくぶりに、実母子以上の愛情が相互にある二人の女性はしめやかに語り合つておいでになった。院がはいつておいでになつたが、

「今夜は巢を追われた鳥のようでかわいそうな私はどこかで寝る

ことにしよう」

と言つて、他の室へ行つておしまいになつた。起きていた夫人の姿を御覧になつたことがおうれしそうであつたが、それはしいてよいように見てみずから慰めておいでになるのにすぎないのである。

「離れた所では、こちらからあちらへ歩いてお帰りになることがたいへんですし、私もまたあちらへ上がることはもうできなくなつていますから」

と夫人は言つていて、中宮はしばらくこの病室のあるほうの対におとどまりになることになつた。明石^{あかし}夫人もこちらへ来てしみりとした会話が日々かわされた。女王の心の中では頼みたく、

言っておきたく思うことが幾つかあったが、賢そうに死後のことを今から言うように取られるのを恥じて、そうした問題には触れないのであった。ただ人生のはかなさをおおよくに、言葉少なに、しかも軽々しくはなしに話すのが、露骨に死期の近いことを言うよりもどんなに心細い気持ちでいるかを思わせた。にようおう女王は孫である宮たちを見ても、

「あなたがたがどうおなりになるだろうと、将来が見たいような気がしましたのも、私のようにつまらない者でいながら、知らず知らず命を惜しんでいたわけでしょうか」

こんなことを言つて涙ぐむその顔が非常に美しかった。なぜそんなふうにはかり感ぜられるのであろうとお思ひになつて、中宮

はお泣きになった。遺言のようにはせず話の中などで時々、

「長く私に仕えてくれました人たちの中で、たいした身寄りのないようなかわいそうなだれだれなどを、私がいなくなりましたあとで、あなたから気をつけてやってください」

などというほどにしか死後のことは言わないのである。

病室で読経ときようの始められる日になってから中宮は東の対へお移り

になった。三の宮は幾人もの宮様がたの中にことに愛らしいお姿でそばへ遊びにおいでになるのを、病苦の薄らいだ時などに女王は前へおすわらせして、女房たちの聞いていないのを見ると、

「私がいなくなりましたら、あなたは思い出してくださるでしょうね」

などと言うのであったが、宮は、

「恋しいでしょう。私は御所の陛下よりも中宮様よりもお祖母様ばあが好きなんだ。いらっしやらなくなったら私は悲しいでしょうよ」とお言いになって、目をこすって涙を紛らしておいになる宮のお姿のおかわいたために、夫人は微笑をして見ているのであったが、目からは涙がこぼれた。

「あなたが大人におなりになったら、ここへお住みになって、この対の前の紅梅と桜とは花の時分に十分愛しておながめなさいね。時々はまだ仏様へもお供えになってね」

と言うと、宮はおうなずきになりながら、夫人の顔を見守っておいになったが、涙が落ちそうになったので、立ってお行きに

なつた。手もとでお育てしたために夫人はこの宮と姫君にお別れ
することをことに悲しく思つていた。

ようやく秋が来て京の中も涼しくなると、紫夫人の病氣も少し
快くなつたようには見えるのであるが、どうかするとまたもとの
ような容体にかえるのであつた。まだ身にしむほどの秋風が吹く
のではないが、しめつぽく曇る心をばかり持つて夫人は日を送つ
た。ちゆうぐう中宮は御所へおはいりにならず、もう少しここにおいで
になるほうがよいことになるでしょうと女王はお言ひしたいので
あるが、死期を予感しているように賢がつて聞こえぬかと恥ずか
しく思われもしたし、御所からの御催促の御使みつかいのひつきりなし
に来ることに御遠慮がされもして、おとどめすることも申さない

でいるうちに、夫人がもう東の対へ出て来ることができないために、宮のほうからそちらへ行こうと中宮が仰せられた。

失礼であると思ひ心苦しく思ひながらも、お目にかからないうることも悲しくて、西の対へ宮のお居間を設けさせて、夫人はなつかしい宮をお迎えしたのであつた。夫人は非常に瘦やせてしまつたが、かえつてこれが上品で、最も艶えんな姿になつたように思われた。これまであまりにはなやかであつた盛りの時は、花などに比べて見られたものであるが、今は限りもない美の域に達して比較するものはもう地上になかつた。その人が人生をはかなく、心細く思っている様子は、見るものの心をまでなんとなく悲しいものにさせた。

風がすごく吹く日の夕方に、前の庭をながめるために、夫人は起きて脇きょうそく息によりかかっているのを、おりからおいでになった院が御覧になつて、

「今日はそんなに起きていられるのですね。宮がおいでになる時にだけ気分が晴れやかになるようですね」

とお言いになった。わずかに小康を得ているだけのことに喜んでおいでになる院のお気持ち、夫人には心苦しくて、この命がいよいよ終わつた時にはどれほどお悲しみになるであろうと思つたと物哀れになつて、

おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる萩はぎの上露

と言った。そのとおりに折れ返った萩の枝にとどまっているべくもない露にその命を比べたのであったし、時もまた秋風の立っている悲しい夕べであったから、

ややもせば消えを争ふ露の世に後れ先きだつ程ほどへずもがな

とお言いになる院は、涙をお隠しになる余裕もないふうでおありになった。宮は、

秋風にしばし留まらぬ露の世をたれか草葉の上とのみ見ん

とお告げになるのであつた。美貌びぼうの二女性が最も親しい家族として一堂に会することが快心のことであるにつけても、こうして千年を過ごす方法はないかと院はお思われになるのであつたが、命は何の力でもとどめがたいものであるのは悲しい事実である。「もうあちらへおいでなさいね。私は気分が悪くなつてまいりました。病中と申してもあまり失礼ですから」

といつて、女王は几帳きちようを引き寄せて横になるのであつたが、平生に超こえて心細い様子であるために、どんな気持ちができるのかと不安に思おぼしめ召して、宮は手をおとらえになつて泣く泣く母君を見ておいでになつたが、あの最後の歌の露が消えてゆくように終し

ゆうえん

焉ゆえんの迫つてきたことが明らかになつたので、誦經ずきようの使いが

寺々へ数も知らずつかわされ、院内は騒ぎ立つた。以前も一度こんなふうになつた夫人が蘇生そせいした例のあることによつて、物怪もののけのすることかと院はお疑いになつて、夜通しさまさまのことを試みさせられたが、かいもなくて翌朝の未明にまつたくこと切れてしまつた。

宮もお居間にお帰りにならぬまままで臨終に立ち会えたことを、うれしくも悲しくも思召した。御良人ごりようじんも御娘みむすめも、これを人生の常としてだれも経験していることとお思ひになれないで、言語に絶した悲しみ方をしておいでになるのである。二条の院の中は絶望して心を取り乱した人ばかりになつた。院はお心の静めよ

うもないふうで、大将を几帳のそばへお呼び寄せになつて、

「もうだめになつたことは確かなようだ。長く希望していた出家のことをこの際に遂げさせてやらないのは惨酷なように思われるが、加持に来ていた僧たちもどきよう読経の僧たちも皆することをやめて歸つたとしても、少しは残っているのもあろうから、この世の利益はもう必要がなくなつた今では冥土めいどのお手引きに仏をお願いすることに、髪を切つて尼にすることをそのだれかにさせてくれ。相当な僧ではだれが残っているか」

こうお言いになる御様子にも、自制しておいでになるのであるうが、御血色もまつたくないようで、涙がとまらず流れているお顔を、ごもつともなことであると大将は悲しく見た。

「物怪などが周囲の者を驚かすために、そうしたことをすることもあるのですが、絶望の御状態とはそうしたわけではないのでございませうか。それでございましたら、ただ今承りましたことは結構なこととございまして、一日一夜でも道におはいりになつただけのことは報いられるでしょうが、しかしもうまつたくお亡なくなりになつたのでございましたら、死後のお髪ぐしの形を変えますだけのことがあの世の光にはならないでしょう。そして眼めで見る遺族たちの悲しみだけが増大することになるだけのこととございませうから、私はいかがかと存じます」

と大将は言つて、忌中をこの院でこもり続けようとすする志のある僧たちの中から人選して念仏をさせることを命じたりすること

なども皆この人がした。今日までだいそれた恋の心をいだくとい
うのではなかつたが、どんな時にまたあの野分のわきの夕べに隙見すきみを遂
げた程度にでも、また美しい継母が見られるのであろう、声すら
も聞かれぬ運命で自分は終わるのであろうかというあこがれだけ
は念頭から去らなかつたものであるが、声だけは永遠に聞かせて
もらえない宿命であつたとしても、遺骸いがいになつた人にせよもう一
度見る機会は今この時以外にあるわけもないと夕霧は思うと、声
も立てて泣かれてしまふのであつた。

あるだけの女房は皆泣き騒いでいるのを、

「少し静かに、しばらく静かに」

と制するようにして、ものを言う間に几帳の垂れ絹を手で上げ

て見たが、まだほのぼのとしはじめたばかりの夜明けの光でよく見えないために、灯ひを近くへ寄せてうかがうと、麗人の女王にようおうは遺骸になってなお美しくきれいで、その顔を大将がのぞいていても隠そうとする心はもう残っていないかった。院は、

「このとおりにまだなんら変わったところはないが、生きた人でないことだけはだれにもわかるではないか」

こうお言いになって、袖そでで顔をおさえておいでになるのを見ては、大将もしきりに涙がこぼれて、目も見えないのを、しいて引きあけて、遺骸をながめることをしたがかえって悲しみは増してくるばかりで、気も失うのではないかと夕霧はみずから思った。横にむぞうさになびけた髪が豊かで、清らかで、少しのもつれも

なくつやつやとして美しい。明るい灯のもとに顔の色は白く光るよう
で、生きた佳人の、人から見られぬよう見られぬようと願う
心の休みなく働いているのよりも、己おのれをあやぶむことも、他を疑
うこともない純粹なふうで寝ている美女の魅力は大きかった。少
々の欠点があつてもなお夕霧の心は恍惚こうこつとしていたであらうが、
見れば見るほど故人の美貌びぼうの完全であることが認識されるばかり
であつたから、この自分を離れてしまふような気持ちのする心は
そのままこの遺骸にとどまつてしまふのではないかというような
奇妙なことも夕霧は思つた。

長く仕えていた女房の中に意識の確かにあるような者はない状
態であつたから、院は非常に悲しい気持ちをしておしずめにな

つて、遺骸の始末などをあそばすのであった。昔も愛人や妻の死におあいになつた経験はおありになつても、まだこんなことまでも手ずから世話あそばされたことはなかつたから、自身としては空前絶後の悲しみであるとしておいでになるのであった。紫の女王の遺骸はその日のうちに納棺された。どれほど愛すればとて遺骸は遺骸として葬送せねばならぬのが人生の悲しい掟おきてであつた。

はるばると広い野にあいた場所がないほどにも葬送の人の集まつたいかめしい儀式であつたが、送られた人ははかない煙になつて間もなく立ち昇のぼつてしまった。当然のことではあるがこれをも人々は悲しんだ。空を歩いているような気持ちで院は人によりかかつて足を運んでおいでになるのを見ては、あの高貴な御身分で

と低級な頭のものさえも御同情して泣かない者はなかつた。遺骸の供をして来た女房たちはまして夢の中に彷徨ほうこうしているような気持ちになつていて、車から転ころび落ちそうに見えるのを従者たちは扱いかねていた。昔、大将の母君の葬夫人あおいの葬送の夜明けのこゝとを院は思い出しておいでになつたが、その時はなお月の形が明めいりりようよう瞭に見えた御記憶があつた。今は心も目も暗闇くらやみのうちのよような氣のあそばされる院でおありになつた。女王は十四日に薨こうき去よしたのであつて、これは十五日の夜明けのことである。

はなやかな日があつて、野原一面に置き渡した露がすみずみまできらめく所をお通りになりながら、院はいつそうこの時人生というものをいとわしく悲しく思召して、残つた自分の命といつて

も、もう長くは保ちえられないものではないであろうから、こうした苦しみを見る時に、昔からの希望であつた出家も遂げたいとばかりにお思われになるのであつたが、気の弱さを史上に残すことが顧慮されて、当分はこのままで忍ぶほかはないと御決心はあそばされても、なお胸の悲しみはせき上がってくるのであつた。

夕霧も、紫夫人の忌中を二条院にこもることにして、かりそめにも出かけるようなことはなく、明け暮れ院のおそばにいて、心苦しい御悲歎ひたんをもつともなことでであると御同情をして見ながら、いろいろと、お慰めの言葉を尽くしていた。

風が野分のわきふうに吹く夕方に、大将は昔のことを思い出して、ほのかにだけは見る事ができた人だったのにと、過ぎ去った秋の

夕べが恋しく思われるとともに、また麗人の終わりの姿を見て夢のようであつたことも人知れず忍んでいると非常に悲しくなるのを、人目に怪しまれまいとする紛らわしには、阿弥陀仏あみだぶつ、阿弥陀仏と唱えて数珠じゆずの緒を繰ることをした。涙の玉も混ぜてである。

いにしへの秋の夕べの恋しきに今はと見えし明け暗ぐれの夢

この夢の酔いごころは永遠の悲しみのお澱を大将の胸に残したようである。りっぱな僧たちを集めていみごも忌籠りの念仏をさせることは普通であるが、なおそのほかに法華ほけ経をも院がお読ませになつているのも両様の悲哀を招く声のように聞こえた。

寝ても起きても涙のかわくまもなく目はいつも霧におおわれたお気持ちで院は日を送っておいでになった。一生を回顧してごらんになると、鏡に写る容貌ようぼうをはじめとして恵まれた人物として世に登場したことは確かであるが、幼年時代からすでに人生の無常を悟らせられるようなことが次々周囲に起こって、これによって仏道へはいれと仏の促すうながのをしいて知らぬふうに世の中から離脱することのできなかつたために、過去にも未来にもこんなことがあるうとは思われぬ大なる悲しみを体験させられることになった、これほど悲しみのしずめがたい心を持っている間は、仏の道にもはいることは不可能であろうとみずからおあやぶまれになる院は、この心持ちを少しゆるやかにされたいと阿弥陀仏を念じて

おいでになった。

忌中の院をお見舞いになるかたがたは宮中をはじめとして、皆形式的ではなくたびたびの使いをおつかわしになるのであった。

仏道から言えばいっさいのことは院の御念頭のから除けられてよいわけではあるが、さすがに悲しみにぼけたふうには人から見られたくない、こうした一生の末になって妻を失った悲しみに堪えないうで入道したという名の残ることだけははばかっておいでになるために、見えぬ拘束を受けて自由に出家のおできにならぬこともこのごろの悲しみに添った一つの悲しみになった。

太政大臣は人が不幸であるおりに傍観していられぬ性質であったから、紫夫人というような不世出の佳人の突然に死んだことを

惜しがり、院に御同情してたびたび見舞いの手紙をお送りした。昔大将の母君が亡なくなったのも秋のこのごろのことであつたと思ひ出して、大臣は当時の悲しみもまた心の中に湧わき出してくるのであつたが、その時に妹の死を惜しんだ人たちも多くすでに故人になつている、先立つということも、後おくれるということもたいした差のない時間のことではないかなどと考えて、ものものしきみりと感ぜられる夕方に庭をながめていた。息子むすこの蔵くらうど人少将を使いにして六条院へ手紙を持たせてあげた。人生の悲しみをいろいろと言つて、古い親友をお慰めする長い文章の書かれてある端のほうに、

いにし
古への秋さへ今のこちして濡れにし袖そでに露ぞ置き添ふ

という歌もあつた。ちようど院も、過去になつたいろいろな場合を思い出しておいでになる時であつたから、大臣の言う昔の秋も、早く死別した妻のことも皆一つの恋しさになつて流れてくる涙の中で返事をお書きになるのであつた。

露けさは昔今とも思ほえずおほかた秋の世こそつらけれ

悲しいことだけを書いておいては、あまりに弱いことであると批難するであろう、大臣の性格を知つておいでになる院は御注意

をみずからあそばして、たびたび厚意のある御慰問を受けているといつて、よろこ悦びの言葉などもお書き加えになるのをお忘れにならなかつた。

薄墨色を着るとあおい葵夫人の死んだ時にお歌いになつたその喪服よりも、今度は少し濃い色を着て悲しみを示された。

どんな幸運に恵まれていても、理由のない世間の嫉妬しつとを受けることがあるものであるし、またその人自身にもきようまん驕慢な心ができてそのために人の苦しめられる人もあるのであるが、紫の女王という人は不思議なほどの人氣があつて、何につけてもかつこう渴仰され、ほめられる唯一の瑕きずのない珠たまのような存在であり、善良な貴女じよであつたのであるから、たいした関係のない世間一般の人たち

までも今年の秋は虫の声にも、風の音にも、また得がたいこの世の宝を失った悲しみに誘われて、涙を落とさない者はないのである。ましてほのかにでも女王を見たことのある人たちにとって、女王を失った悲しみはとうてい忘られるものではなかった。女王が親しく手もとに使っていた女房たちで、たとい少しの間にもせよ夫人に後れておく生き残っている命を恨めしいと思つて尼になる者もあつた。尼になつてまだ満足ができずに遠く世と離れた田舎いなかへすまい住居を移そうとする者もあつた。

れいぜい冷泉院きささきの後の宮も御同情のこもるお手紙を始終お寄せになつた。故人を忍ぶことをお書きになつた奥に、

枯れはつる野べをうしとや亡^なき人の秋に心をとどめざりけん

はじめてわかつた気もいたします。

とお書きになったものを、院はお悲しみの中でも繰り返しお読
みになって、いつまでもながめておいでになった。趣味の洗練さ
れた方として、思うことも書きかわしうる方はまだお一人この方
があるとお思いになって、院は少しいの紛れる気持ちをお覚
えになりながら涙の流れ続けるためにお筆が進まなかつた。

昇^{のぼ}りにし雲井ながらも返り見よわれ飽きはてぬ常ならぬ世に

お返事をお書き了おえになつたあとでもなお院は見えぬものに見入つておいでになつた。

お気持ちを強くあそばすことができずに悲しみにぼけたところがあるようにみずからお認めになる院はもとの夫人の居間のほうにばかりおいでになつた。仏像をお据すえになつた前に少数の女房だけを侍はべらせて、ゆるやかに仏勤めをあそばす院でおありになつた。千年もごいっしよにいたく思おぼしめ召した最愛の夫人も死に奪われておしまいにならねばならなかつたことがお気の毒である。もうこの世にはなんらの執着も残らぬことを自覚あそばされて、遁と世んせいの人とおなりになるお用意ばかりを院はしておいでになるのであるが、人聞きということでもまた躡ちゆうちよ躡しておいでになるの

はよくないことかもしれない。

夫人の法事についても順序立てて人へお命じになることは悲しみに疲れておできにならない院に代わって大將がすべて指図さしずをしていた。自分の命も今日が終わりになるのであるとお考えられになる日も多かったが、結局四十九日の忌いみの明けけるのを御覧になることになったかと院は夢のように思召した。中宮ちゆうぐうなども紫夫人を忘れる時なく慕っておいでになった。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

御法

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>